

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：若野三朗 幹事：吉山宥海

情報委員長：清水 忠

1979・3月1日

第135号



“色彩の演出家”

金沢美術工芸大学 山岸 政雄 先生

イギリスにはニュートンの物理学以来の色彩が、日本には日本伝統の色があるように色彩の世界は極めて巾が広い。

色彩、それは人間社会になくてはならないものである。しかしそれを使うことが人々の役にたつ半面一つ間違えば大変危険となる要素をも持ち合せている。

人々をして影響たらしめる色彩の演出、その歴史の一コマを紹介してみよう。

1936年、11回ベルリンオリンピック、ヒットラーはハーケンクロイツをはじめ色彩、デザイン、スタイルに至るまで統一し国威を発揚した。彼の造形、色彩的な演出は、捕えたユダヤ人を振り分けるのに色別の星型ワッペンを胸に付けさせたことにも現われている。

宗教にも違った面の演出がある。ローマ法王が選ばれる時、礼拝堂のエントツから立ち上る煙が黒か白かによって、枢機卿による法王選挙が成功したか否かが煙の色によって、判かるという。実に13世紀以来の伝統がにじみ出ているすばらしい演出法だ。

色彩の合図は、元来質の高いものでいろんな処で応用されている。軍事的には敵の攻撃から身を守る為にバスや建物の色を変える迷彩がよく使われたし、ベトナム戦争時アメリカの海軍では、空母の甲板上でそれがある。効率よく組織が働く為に人々が仕事によって赤や黄のジャケットを着用、色彩をうまく利用したものだ。……

現代は商品やインテリアにおける色彩をはじめ、真にカラーイメージ時代だ。

古きよき金沢の街並はどんな色がよいか、今（伝統都市金沢に期待するカラーイメージ）と題して若者に問いかけている。

—金沢北RC例会講話から—（文責 米沢修一）

私 の 名 刺

中 村 三 次



私の職業分類は、民事弁護士となっておりますが、検事出身で民事弁護士というのは、いささか奇異に感ずるむきもあるかと思いません。

しかしながら、検事の中でも例えば、法務省の民事局には、民事裁判法規の立案運営を専門に扱っている検事がおり、又法務省の訟務局及び、法務局の訟務部には、国や公共団体に関する民事裁判の事件を専門に取扱っている検事がおります。私も検事在任中の後半には法務局訟務部に併任され、国関係の民事裁判の事件処理に関与していた時期もあり、又検事退官前の数年間は、主として、民事事件と交錯する労働経済事件の処理にも忙殺されて居りました。

そのような訳で、検事退官後弁護士を開業した結果、刑事事件の弁護もさることながら、民事事件の処理に親しむ結果となり、現在に至っております。

弁護士は、常勤の公務員との兼職は出来ませんが、非常勤の公務員との兼職は認められて居ります。そのような関係で、建設業法に基づく石川県建築工事紛争審査会委員、土地収用法に基づく石川県収用委員会委員、その他金沢家庭裁判所調停委員、金沢地方裁判所調停委員等を兼務しております。

趣味の囲碁は十年一日の如く一向に上達せず、又、ゴルフはハンデ-36からはじまり、現在ハンデ-30となっておりますが、これはハンデ-の下限切り上げによる自動的引き上げによるものですから、腕の方は推察におまかせします。

事務所のデスクより例会場のある卯辰山が見えます。「法律家は良き隣人」といわれるよう、先達会員の御指導により、人格の陶冶に相つとめたいと思っております。

情 報 抄 録

ロータリーの創立75周年記念日

創立75周年記念日(1980年2月23日)が近づいてきて、注目されるような奉仕事業の実施が求められているおりから、R.I.会長クレム・レヌフ氏の次の言葉は一だんとその適切さを加えてきた。「中国に実に面白い寓話がある。あるおじいさんの話で、そのおじいさんは仕事に行くのに毎日小山を一つ越えなければならなかった。おじいさんは、山のてっぺんのところにくるといつも両手に一つずつ石を拾い、それを麓までもって降りるようにしていた。そのわけを聞かれたとき、おじいさんはこう答えたのである。『わたしゃこの山を動かすつもりなんだ。まあ、わたしの生きているうち、いや息子の代にだってできっこないことだが、でも

いつかはこの山もなくなるんだ』。何がなんでもと一途に思っていることには、ふと、それを果す機会が与えられるものだ、と言った人がある。機会はまだにわれわれの前にあらわれているということ、われわれは立ち上がらなくてはならないということ、これが私の固い信念である。」



落語(伍)者の奉仕

岡部 三郎

職業奉仕としての欄ということであるが、医師の職業奉仕となると、やゝ画一的な感を免れない。また、ご開業の先生方は粉骨砕心の職業奉仕が裏目にでて高所得のための不当な批判さえ受けかねない社会である。医師が、心と技をもって患者に尽すのは当然であり、これが使命である。しかし受療者側にはこの奉仕の精神を曲解し受診のエチケットを守らない方が多くなっている。これに触れだすとやゝ愚痴になるきらいがあるので今回は職業以外の奉仕をテーマとしたい。といっても自分の家の前の除雪さえ進んでやることのない私に何ができるかといえば、真に自分勝手な考え方であるが、自分の趣味の上で皆様に喜んでもらえないかという、まさに我田引水の発想である。もう8年前になろうか、学生時代より好きで聴いていた落語を本来の良い姿で生のまま味わいたいと考え、それのできる会をもつことが社会的に微かな奉仕となるならと思った。それが古典落語鑑賞会を始めた所以である。

良いものをお安く提供するには、大きな基盤が必要であることは経済の基本であろう。初めは噺家仲間にもお客様にも左程信用がない。噺家さんたちにも事情を話して泣いてもらった。しかし、当然のことながら赤字も大きく、一諸に世話をやいてくれた友人にも多大の経済的負担をかけた。切符を買って頂いている方々にも、やゝ押売りの恐れがいなめない。しかし何回か辛抱しているうちにお客様の方のご理解もえられ、報道関係のご協力もあってどうやら大きな会をもてる様になり、好き仲間の世話人方が切符の消化、会場整理などと、いまではその奥様方にも力を借していただいている。あくまでも電波規制を受けない本当の良い噺を楽しむことが本来の目的である。

日本人の心の中を流れてきた古典落語には人間の本当の姿が浮き彫りにされる。

八つツァンや熊さん、赤井御門守、与太郎、長屋のご隠居の生き方に人道的な嘘はない。医者はある意味では諷刺の対象とさえなっている。口々に奉仕を叫びながら無闇に威張る人、自分のためには、平気で人を裏切る人、鼻もちならない人が、多い社会である。“たかが落語”。好きな言葉である。その落語を聴いて笑いながら自己反省の機会にするのも、ロータリアンの道を究める一策かと思われる。

今後は公共の協力もえて日本人が社会の一員としての勉強を心地良くできる一つの方法である古典落語鑑賞会を続けることを社会奉仕と考えたい。でも、道路の除雪も進んでやらなくては。今年には雪が少なくて幸い……。

歴代、国際ロータリー会長の指針

1973～54年度 ホアキンS.シビルス(ウルグァイ)

クラブがふえれば友人が増す。

友人がふえれば奉仕の機会を増す。

